

省略された言葉を補って、 作者の考えに迫る指導

— 古人の考え方に学ぶ —

新しい指導を考える会

1 はじめに

『徒然草』は話題の幅が広く、自由な視点でさまざまなエピソードについての意見や感想が書かれており、中学生が当時の人々の生活や考え方を知らううえで適当な教材である。作者兼好法師の文章は簡潔でわかりやすく、主張もはっきりしている。しかし、理路整然と書かれてはいるものの、作者のものの考え方や当時の時代背景などが補われて、初めて理解できる段も多い。

そのような理由から古典は難しいと指導者が思い込んでしまいい、一方的に知識を教え込んでしまう授業になりがちである。文章の流れを理解するための手がかりを十分に与えながらも、自分で読み、内容を筋道立てて理解する手順を踏ませ、作者のものの見方や考え方に迫ることで、「考える力を育む」学習を展開できないかと考えた。

〈指導の流れ〉

第一次 十分に音読する

古典では、十分に音読することが基本である。繰り返し音読することで古文独特の言葉のリズムを感じ取らせ、文章の流れや意味のかたまりをとらえさせたい。今回は、作者が伝えたかった内容を考えながら読むように指示した。

第二次 構成をとらえる

三つの段落がそれぞれ何を述べているのかをワークシートにまとめさせた。同時に、それぞれの段落の話し手（主語）を確認させた。（傍線部）

第一段落 仁和寺の法師が、石清水八幡宮に参詣したこと。

第二段落 仁和寺の法師が、仲間に向かって石清水参詣の様子を語ったこと。

第三段落 作者が、その話を聞いて考えたこと。

文章の内容をここまで整理すると、第二段落の作者の意見と、第一、第二段落のエピソードの関係を構成上とらえることができるようになる。しかし、文章の簡潔さゆえになぜ作者がそのように考えたのか、一読しただけではわかりにくい。伽藍配置の知識がなければ、「法師」の勘違いが見えないのだ。

初発のアンケートでも、最後の一行の意味がわかりにくいという者が半数近くいた。また、わからない語句として「先達（その道の先導者）」を挙げる者が多かった。これは、辞書を引くことで「案内人」と言い換えて授業を進めることにした。

2 指導の目標

『徒然草』を読む（二年生）
〈指導の目標〉

○作者がどんな思いで出来事をとらえ、どのような意見や感想をもっているのかについて考えを深める。

○作者の意見や感想を、省略された言葉を補いながら説明する技能を育てる。

○作者の考えに対して、自分なりの感想をもつ。

3 指導の実際

(1) 基本的学習として

『仁和寺にある法師』第五十二段

◎作者の考えを、視点を改めてリライトする

『仁和寺にある法師』として親しまれる『徒然草』第五十二段は、古語の意味がわかっていても、学習者が一人読みするにはなかなか難しい文章である。それは、「石清水八幡宮」の独特の伽藍配置を学習者が知らないからである。文章から推察するに、作者の周りではだれもが知っていたようであるが、当時は神仏混淆であったため神社の境内に寺があったことや、本殿だけが山の上に位置していたことも含め、地図と解説が必要となる。教科書にも立体的でわかりやすい絵が掲載されている。これを手がかりに、この段で作者が述べたかった内容を学習者が自分の言葉で再構成し、まとめる学習を試みた。

第三次 視点を改めてリライトする

「先達はあらまほしきことなり」とあるが、もし、そうであったならこのエピソードはどうなっていたのかを、教科書の図も参考にしながら考えさせ、作者の意見を「もし先達がいたなら」に続けて書き換えてみるよう指示した。

A もし先達（案内人）がいたなら、法師は石清水八幡宮に参詣することができただろう。

最も多かった解答であるが、これでは「法師」がなぜ参詣できなかつたかがわからない。そのことを助言すると、次のように書き換えた。

B もし先達（案内人）がいたなら、法師は石清水八幡宮が山の上にあることを教えてもらえたと思われるので、そこに参詣することができただろう。

ところで、初発の感想には次のような意見が見られた。

・仁和寺の法師に、本当はまだ石清水八幡宮に参っていないことを（作者や法師の仲間が）教えてあげればいいのに。
・仁和寺の法師は、もう一度石清水八幡宮に行って、きちんと参ればいいと思った。

この感想を紹介すると、共感する生徒が多数いた。「では、なぜそのように展開しないのか。」という質問に対し、生徒は活発に意見を述べ合った。

実践提案 ①

実践提案 ②

実践提案 ③

- ・ 作者は法師の話の笑い話のように書いている。何も知らない法師の自慢話をおもしろいと感じているから。
- ・ 作者はうわさを聞いただけで、実際にその法師とは会っていないのだから、しかたがない。
- ・ 「年寄るまで」と書いてあるから、法師はとても年をとっていたのだろう。だから、もう一度遠い石清水八幡宮まで行くのは無理だと思っ。
- ・ 満足している年寄りに、「あなたは間違っている」というのはかわいそうだと思う。

作者は、『仁和寺にある法師』やその行動をどのようにとらえているのかということが話題になった。とらえ方は描写に反映する。そこで、作者は「法師」をどのように表現しているのか、つまり読み手にもどのように伝えたいのかを、言葉を根拠にしながら洗い出すよう指示した。実際には、教科書に傍線を引いて、横に気づいたことを書き込む作業である。

「年寄るまで石清水を拜まざりければ、心うく覚えて」や「ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」などから、「法師」の一人合点してしまう愚かさともに、信心深い姿や、無邪気で憎めない人柄も浮かんでくる。

授業の一連の流れは、作者の執筆の意図に迫る学習である。ここで再度、作者の意見をライトさせてみる。

「の何に感動して「あはれ」と書いたのか、なぜ「この木」の存在を嘆くのか、学習者にとってこの段のみから理解するのは難しい。

作者の人生観や住居観が深く関わっているであろうこの段には、読み解く手がかりとして二つの文章を現代語訳と語釈をつけて提供した。一つは、『徒然草』第十段「家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、飯の宿りとは思へど、興あるものなれ。」に続く文章で、作者が「心にくし（奥ゆかしくてすばらしい）」と感じる住居のあり方や庭の様子などがつづられている。もう一つは、同じく第十八段「人はおのれをつづまやかにし、おごりを退けて、財（たから）を持たず、世をむさぼらざらんぞ、いみじかるべき。」に続く文章で、清廉を貫いた中国の二人の賢人を紹介したものである。

まず、参照する二つの文章に表れた作者の考え方に傍線を引き、全員で確かめた。その後、三つの段を比較しながら読むことで、ほとんど学習者は、「いほり」を訪ねたときの作者の心情の変化を、自分で言葉を補いながら説明することができた。さらに「作者があこがれている暮らし方」について話し合わせることで、自分たちの「読み」を確かめ合わせた。現代を生きる自分たちと比べ、「(物を)持たない」ことをよしとする作者の生き方に、学習者は新鮮な感動を覚えたようである。

『徒然草』第四十五段「公世の二位のせうとに」のように、作者の意見が直接書かれていない段も発展教材に適している。この段階になると、生徒も学習の流れを把握し、内容をとらえながら、省略されている言葉を補って作者の考えをまとめることができるようになってくる。また、読み深める作業を繰り返す中で、作者の考え方や感じ方を漠然とながらわかってきて

- C もし「先達」がいたなら、法師は石清水八幡宮が山の上にあることを教えてもらえたと思われるので、そこに参ることができたら。信心深い老法師が、長年の希望をかえなえることができなかつたのは気の毒なことである
- C もし「先達」がいたなら、法師は石清水八幡宮が山の上にあることを教えてもらえたと思われるので、そこに参ることができたら。勘違いからせつかくの信心が無駄に終わってしまい、残念である。

そして、作者の思いは「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」へと続くのである。

(2) 発展学習として

「神無月のころ」第十一段

「公世の二位のせうとに」第四十五段

◎複数の段を比較して読むことで、作者の考えを読み取る

第十一段「神無月のころ」も、作者の意見「この木なからましかば、と覚えしか。」で文章が終わる。同様に「この木がなかつたならば」に続けて、作者の意見をライトすることで、執筆の意図に迫ることができると考えられる。同段中程の「かくてもあられるよ、とあはれに見るほどに」「少しことさめて」とあわせて考えさせることで、作者の心の変化を読み取らせたい。しかし、この文章も『仁和寺にある法師』と同様、簡潔であるがゆえに作者の真意がわかりにくい。作者が「いほ

いる。作者が、呼称が気に入らず次々と対策を講じる良覚僧正の姿をどう見ているか、むきになって怒る良覚僧正を嘲笑するように呼称をつけ続ける周りの「人」をどう見ているかを話し合わせながら、「作者はこの出来事にどんな感想をもったのだろう」と問いかけた。ここでは、兼好法師という人物が「悪口はいけない」のような場当たりの常識論よりも、賢さや愚かさも含めた人間の生き方にまで言及するような意見や感想を述べる傾向があることをおさえなければならぬ。さまざまな意見やことわざが挙げられた。根拠がしっかりと書いて説得力のあるものを複数、学習者たちに選ばせる形でまとめた。その後、この文章の感想を述べ合ったが、学習者たちは展開にはおもしろみを感じながらも、比較的良覚僧正に対して好意的であった。

4 おわりに

長い時を経て今なお受け継がれている文学は、人間の普遍的な姿を伝えるものであり、現代の文学に劣らぬ深い叡智と人間的な感情に満ちている。だからこそ、現代を生きる中学生にも共感できるものも多く、作者のものの見方や感じ方、ひいては人生観に学ぶことも多い。

主語や助詞を補いながら書かれている内容を理解することも、初期の段階では大切であるが、さらに当時の人々の生き方を、古典ならではの言葉と時代背景の中で読み取り、楽しんだり考えたりできる態度や技能を育てる古典学習でありたい。